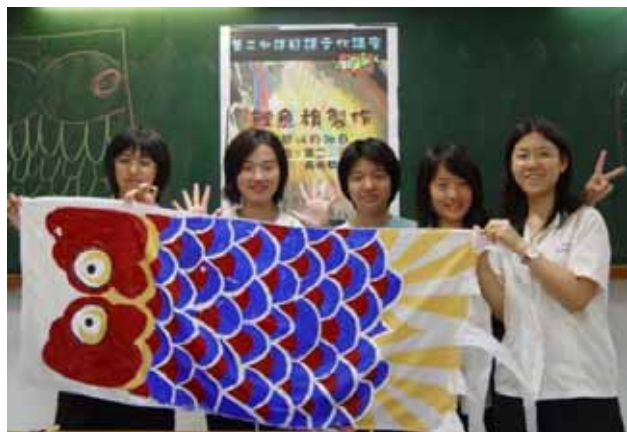


住所：台北市慶城街28號 通泰商業大樓
TEL：02-2713-8000 FAX：02-2713-0705
HP：http://www.koryu.or.jp/nihongo（日本語センター）
E-mail：nihongo@mail.japan-taipei.org.tw
発行：財団法人交流協会日本語センター
編集：中尾真樹・余啓夫 編印：加政印刷有限公司

普通高校における第二外国語としての日本語教育の歩み

（財）交流協会日本語専門家 上條純恵

当協会発行の『台湾における日本語教育事情調査 平成15年度』によると、台湾の日本語学習者は128,641人である。このうち普通高校の第二外国語として日本語を学ぶ学生は17.2%、22,221人に上る。これは教育部が推進する第二外国語教育計画によるところが大きい。今年1月から、教育部が発表した「推動高級中学第二外国語教育第二期五年計画」が実施された。ついては、これまでの普通高校における日本語教育の歩みを概観する。



国立師範大学付属高校での授業 鯉のぼり作り

1. 第二外国語教育が実施されるまで

普通高校のカリキュラムに第二外国語が選択科目として導入され、実施要領が「高級中学課程標準」（指導要領）に初めて盛り込まれたのは1983年（民国72年）のことである。但し、この時点で第二外国語として指定されたのはドイツ語、フランス語、スペイン語であった。また、実際に第二外国語が開講されたという報告はない。

それから12年後の1995年（民国84年）の「高級中学課程標準」では選択科目として日本語が加えられた。この時期は台湾がIT産業へ積極的に参入し、社会全体でグローバル化が声高に叫ばれ始めた頃である。教育部（日本の文部科学省に相当）が英語以外の外国語にも早いうちから触れさせるという政策を打ち出したことで、第二外国語教育実施の気運が高まった。これを受け、1996年（民国85年）から3年間にわたり教育部によって「推動高級中学選修第二外国語文実験計画」が実施されたが、これは本格的な第二外国語教育の先駆けとなった。

2. 推動高級中学選修第二外国語文実験計画

1996年（民国85年）から始まった「推動高級中学選修第

二外国語文実験計画」は、初めの年に11校、二年目17校、三年目には23校が参加した。但し、このほかにも教育部からの補助金に頼らず、独自に第二外国語教育を行っている学校や、クラブ活動として第二外国語を取り入れている学校も少なくなかった。

実施から二年目にあたる86学年度の開講状況と人数を見ると（p.2表）、第二外国語履修者のうち74.6%が日本語を選択していることがわかる。この時期、日本ブームを背景に日本語学習熱が高まり、履修希望者が多い場合、抽選や成績による選抜を行う学校もあった。その結果、学習動機が高く基礎学力も備わった生徒が集まり、その教育には一定の成果が認められた。

3. 推動高級中学第二外国語教育五年計画

先の「推動高級中学選修第二外国語文実験計画」を経て、「推動高級中学第二外国語教育五年計画」が1999年（民国88年）7月から2004年（民国93年）12月まで実施された。教育部はこの計画を推進するため、1校あたり40万円を上限に、1年目に2,100万円、2年～4年目は年1,600万円、最後の

(表) 言語別第二外国語履修者数の推移

	日本語			フランス語			ドイツ語			スペイン語			合計	
	学校数	クラス数	人数	学校数	クラス数	人数	学校数	クラス数	人数	学校数	クラス数	人数	クラス数	人数
86 学年度	17	72	2,093	10	19	412	6	12	28	1	1	16	104	2,549
88 学年度	54	300	11,158	26	62	1,948	22	40	1,214	9	10	280	412	14,600
92 学年度	109	411	14,857	49	94	2,828	14	31	933	14	24	688	560	19,306

年には1,400万円を準備予算として確保した。これは教育部が中等教育における第二外国語教育を如何に重視しているかがうかがえるものであり、この計画を実施した後、実施校、履修者が飛躍的に増えた(表)。

2004年12月に「第2回全国高等学校第二外国語教学検討会」が開催され、この五年計画の報告と今後についての話し合いが行われた。報告では日本の高校との姉妹校提携、日本語スピーチコンテスト、また、今年4回目を迎えた語学別文化祭(台北市政府教育局辦理公私立高中第二外語聯合成果發表會)など、多岐にわたる活動が紹介された。

しかし、教育現場においては種々の問題も浮上している。当協会日本語センターでは、中等教育機関の日本語教師への支援の一つとして研修会を開催しており、毎回事後アンケートを行っている。その回答で教育現場における問題点としてしばしば挙げられるのは、「授業時間が放課後に設定されていて授業がしづらい」「定期試験や学校の行事などで授業がキャンセルされてしまい、時間数が確保できない」「履修者数によってクラス数が決まるところがほとんどであるため、教師の雇用体制も安定しない」という第二外国語教育を取り巻く環境の不備である。このような状況により、教師が無力感を感じているというのも実情である。

4. 推動高級中学第二外国語教育第二期五年計画

今実施されている「推動高級中学第二外国語教育第二期五年計画」では、目標として以下の三項目が挙げられている。

- ①第二外国語教育の質と量の向上を目指し、選択科目として実施すること
- ②第二外国語教育の環境を改善し、学習への取り組みを強化すること
- ③高校生の視野を広げ、国際文化教育を根付かせること

また、実施内容については、次のように述べられている。

- ①各種第二外国語のクラスを開講することを奨励し、教育部が補助金を出す
- ②教師育成の制度を整え、教師研修等を行い、第二外国語教育の専門知識を向上させ、教師のレベルアップを図る
- ③高校は大学、在外公館と協力しあい、第二外国語の学習改善の方法を提供してもらうとともに、国内外の相互訪問の機会を増やす
- ④教師の待遇と、カリキュラムの内容を改善する

これらの条項から、第二期五年計画はこれまでの反省を踏まえているということが読み取れる。2002年(91学年度)から大学入試制度が大幅に変わり、大学が独自の入試方法を取り入れることが可能になった。申請入試、推薦入試で日本語力を審査項目の一つに加えている学校もあり、日本語学科には高校で既に基礎学習してきた学生も増えてきている。

正式に大学入試の科目に導入されることはなくとも、このような動きは高校、高校生、またその保護者などに影響を与えるだろう。今後五年間で高校での第二外国語教育をとりまく環境は質的にも量的にも変わっていくことが予想される。

【参考資料】

- 教育部(1998)『高級中学第二外語実験教学報視報告』
 教育部(1998)『高中第二外語教学検討会成果報告録』
 教育部(2004)『第2回全国高中第二外語教学検討会成果報告録』
 (財)交流協会(2004)『台湾における日本語教育事情調査報告書 平成15年度』

「普通高中第二外語日語教育之發展歷程」

(財)交流協會日語專家 上條純惠

依據本協會所發行台灣日語教育現況調查報告 平成15年度台灣的日語學習者共有 128,641 人。其中，在普通高中以選修第二外語的方式學習日語的學生佔了 17.2%，人數達到 22,221 人。這應該歸功於教育部持續推動第二外語教育計畫。教育部頒布的「推動高級中學第二外語教育第二期五年計畫」已於今年 1 月開始實施。藉著這個機會來回顧普通高中日語教育發展至今的歷程。

1. 第二外語實施之前

1983 年(民國 72 年) 公布的「高級中學課程對標準」中首次將第二外語列為普通高中課程的選修科目之一。但於此時，被指定為第二外語的是德語、法語、西班牙語。而且，也沒有任何第二外語課點申請報告。

經過了 12 年，於 1995 年(民國 84 年) 公布的「高級中學課程標準」中，終於將日語列為選修科目。眾所皆知，當時台灣積極投入 IT 產業，正是全體社會開始邁向全球化的時期。同時，由於教育部推行讓學生儘早接觸英語以外之外語的政策，實施第二外語教育已成時勢所趨。於是，教育部自 1996 年(民國 85 年)起實施「推動高級中學選修第二外國語文實驗計畫」，共歷時 3 年，這也就是普通高中正式推行第二外語教育的肇始。

2. 推動高級中學選修第二外國語文實驗計畫

1996 年(民國 85 年)開始實施「推動高級中學選修第二外國語文實驗計畫」，第一年有 11 所學校，第二年有 17 所學校，第三年有 23 所學校參加。同時，也有不少學校不倚賴教育部的經費補助自力推行第二外語教育，或是把第二外語納入社團活動中。

由 86 學年度，也就是第 2 年的開辦狀況及人數來看(請參照表格)，選修第二外語的學生中有 74.6%選擇日語。受到當時哈日熱潮的影響，學習日語風氣盛行，有的學校由於有意願選修的人數過多，採用抽籤或是以成績決定的方式加以選拔。這些學生的學習動機強烈並具備基礎學力，因此教學成果也受到相當的肯定。

3. 推動高級中學第二外語教育五年計畫

歷經之前的「推動高級中學選修第二外國語文實驗計畫」，於 1999 年(民國 88 年) 7 月起至 2004 年(民國 93 年) 12 月實施「推動高級中學第二外語教育五年計畫」。教育部為了推動這項計畫，以每所學校最高補助 40 萬元為原則，編列了第 1 年 2100 萬元，第 2 年至第 4 年各 1600 萬元，最後一年 1400 萬元的預算準備金。由此可知教育部是如何地重視中等教育階段的第二外語教育，而實施第二外語教育的學校及選修第二外語的學生人數也在這計畫開始實施後呈現了大幅增加(請參照表格)。

2004 年 12 月舉行「第二屆全國高中第二外語教學研討會」，會中報告五年計畫實施的成果，並針對今後的發展加以討論。報告中提及與日本高中締結姊妹校、高中生日語演講比賽以及到今年已舉辦四屆的公私立高中第二外語聯合成果發表會(台北市政府教育局主辦)等各式各樣的活動。

但是，在實際教學中卻也出現了種種問題。本協會日本語中心為協助中等教育機構日語教師，定期舉辦研習會。每次研習會後參加者所填寫問卷的回答欄中多次提到「上課時段安排在放學後導致教學上的困難」、「因為定期測驗及學校的活動等原因而取消上課，以致於無法確保上課時數」、「幾乎每所學校都是由學生選修的人數來決定班級數，因此教師聘任制度並不安定」等推行第二外語教育的困境。這樣的環境事實上已造成教師本身的無力感。

4. 推動高級中學第二外語教育第二期五年計畫

現正實施的「推動高級中學第二外語教育第二期五年計畫」，訂定了以下三項目標，

- ① 提升高中第二外語教育之質與量，落實全面實施選修第二外語教學之政策。
- ② 改善高中第二外語教學環境，強化高中第二外語教學學習風氣。
- ③ 拓展高中學生視野，厚植高級中學學生國際文化交流之能量。

實施原則如下所述，

- ① 鼓勵及補助高中參與：鼓勵及補助高級中學開設各種第二外語課程供學生選修，並辦理相關活動。
- ② 提升教學品質：健全師資培育制度，鼓勵教師進修，以提升第二外語師資專業知識及教學品質。
- ③ 營造第二外語學習環境：促使高中與大學相關學系及外國駐台文化單位合作，提供各種學習第二外語管道以改善學習環境，並增加國內外互訪機會。
- ④ 改善師資遴聘與待遇配置。

由以上幾點可以瞭解到，第二期五年計畫是歷經過去不斷檢討反省力求改進之後而制定。自 2002 年(91 學年度)起，大學入學考試大幅變更，入學方式得以由各校自主。有的學校在申請入學、推薦入學時將日語能力納入甄選之考量，而在高中就已經學過基礎課程的日語科系學生也增多了。

儘管日語尚未成為大學入學考試的正式科目，但這種種改變相信對高中、高中生以及他們的父母長輩們有所影響。可以預見在今後的五年之中，發展高中第二外語教育的環境無論在質或量的方面都會有所改變。

第1回「方言の将来」

町博光氏(広島大学大学院教育学研究科教授)

第1回特別講演会講師



近年の著しい共通語化によって、日本の方言は衰退し、ついには消滅してしまうのではないかと心配されています。ほんとうに日本の方言はなくなってしまおうのでしょうか。

逆に現在の方言の状況を、「方言安定期」と説明されることもあります。これまで方言の衰退だと考えられていたものが、実はそうではなく、方言と共通語の使い分け能力が高くなったもので、方言はけっしてなくなっていないというのです。

こういう説明を聞くと、「いやそんなことはない、昔使っていた方言は聞かれなくなっているのだから、方言はあきらかになくなっているのだ」というのが大多数の人の意見でしょう。じっさい、昔の暮らしに必要な、物や小動物の名前などの、いわゆる俚言・訛語などはその多くがすでに消失しています。

ところが方言の基本的なところは、現代でもちゃんと生き残り、さかんに使われています。いわゆる地域共通語として、方言の根幹的な部分は今後も命脈を保っていくのではないかと考えられます。

広島市の現在の方言会話の例を見てみましょう。1997年に採録した、53歳の男性(Uさん)と35歳の女性(Yさん)の会話です。(編集者注:カタカナ表記は方言の音声、ひらがな表記は共通語になおしたもの)

Y アンター。ヒサシブリジャ ネー。ナン ショットン
ネー。ゲンキー。

あんた。ひさしぶりだね。何をしていたの。元気?

U オー ダレカー オモータラ アンタ カー。シー。
おお、だれかと思ったらあんたか。んん。

Y ドコ イッテン ネ。どこにいらっしやるの?

U ヤ チョット ノー。コノサキノ コーミンカンエ
ヨージガ アッテ ノー。コーミンカン エ イッテ
アノ ヤナ カンチャーノ カオ ミンニャ イケン
ノンジャガ。

や、ちょっとね。この先の公民館に、用事があるからね。公民館に行ってあのいやな館長の顔を見ないといけないのだが。

ごく普通の親しい者同士の会話です。たったこれだけの会話の中にも、方言の根幹をささえる言い方がたくさん出てきます。文法面では、～ヨル(～ている)・テ敬語・ヨー～セン(できない)・タコー(高く)のウ音便など。音声面では、オモヤー(思えば)・エー(良い)など。語彙面では、接続助詞ケー(から)や否定のイケン(いけない)などが目につきます。広島弁らしいイントネーションもよく聞かれます。こういう根幹的な要素は今後も広島弁の特徴として使われ続けていくことでしょう。

また若い人たちの間では、新しい方言が作られていくことも観察されています。熊本市での調査では、形容詞のムシャンヨカ・ムシャンエー(かっこいい)、動詞のシニカブル(死ぬほどきつい思いをする)・アクシャウツ(ほとんど困り果てる)、副詞のマウゴツ(ひじょうに、たいへんに)など、いったん中年層に向けて衰退しかかったものを、若者が新しいスタイルのものとして、積極的に受け入れたものです。

このいわゆる若者ことばには地域差も見られます。マクドナルドは、東京でマック、大阪ではマクドと呼ぶのはよく知られています。模造紙をタイヨーシ・ビーシ、ホッチキスの針をシン・タマ、救急絆創膏をバンドエイド・カットバンなど、新しい方言分布も認められています。新しい方言が、地域方言の影響をどの程度受けているのか、これからどのような分布域を形成していくのか興味が湧くところです。

方言衰退から方言安定、さらに新方言の分布と、さまざまにゆれ動く現代の方言状況をふまえ、これからの方言のありかたを考える必要があることを痛感します。

このページでは本号より、当事務所主催の講演会・研修会に講師としてお招きした先生に、現在の日本語・日本語教育で話題となっている事柄などを取り上げて、解説して頂くことになりました。

今回は、5月29日の第1回特別講演会で「日本語教育と日本語の方言」と題してお話いただいた町博光教授が、このページを飾る第1回として方言の新しい姿を紹介してくださいました。

銘伝大学応用日語学系シンポジウム 「応用語文教育の理論と実際」検討会

3月12日(土)、銘伝大学応用日語学系主催のシンポジウム「応用語文教育の理論と実際」が同大学桃園キャンパスにおいて開催された。午前中は特別講演会として、黒沢晶子氏(山形大学留学生センター教授)による「日本語教育文法から見た無題文の「が」と、内海由美子氏(同センター助教授)による「大学における教養教育としてのアカデミック・ジャパニーズ」と題する講演が行われた。午後からは日本語教育、日本語学、日本経済等をテーマにした7つの研究成果の発表があった。日本語教師だけでなく大学院生による発表もあり、各発表に関する質疑応答も活発に行われた。

台日交流促進会主催 春季日本留学説明会



3月20日(日)に、天成大飯店において春季日本留学説明会が開催された。日本の大学、短大、専門学校など、20校のブースのほか、留学中の生活についての相談コーナーも設置された。500人以上が来場し、各ブースで熱心に説明に聞き入った。

台湾日本研究学会主催 2005年全国大専院校日本語スピーチコンテスト

3月26日(土)に、国立台湾師範大学において全国大専院校日本語スピーチコンテストが開催された。20名の参加者が、直前に与えられたテーマについて、3分前後のスピーチをした。第1位に輝いたのは、徳明技術学院の林修生さん(「一生を変える」)。第2位には台湾大学の蔡琇瑚さん(「知る権利とマスコミのあり方」)、第3位に南台科技大学の徐嘉鈺さん(「楽しい我が家」)、第4位に銘伝大学の張雅婷さん(「二十一世紀、台日青年交流の課題」)、第5位に輔仁大学の李中宜さん(「身近な環境保護」)が入賞した。

教育部・台湾日本研究学会・交流協会主催 第1回全国大学生日本語ディベート大会

3月26日(土)に、国立台湾師範大学において、台湾で初の試みである大学生による全国日本語ディベート大会の本選が開催された。予選を勝ち抜いた3校の大学による総当たり戦が行われ、ハイレベルな論戦が展開された。接戦の結果、東海大学が優勝し、準優勝は東呉大学、第三位は南台科技大学となった。なお、劉瑞傑さん(東呉大学)と李姿宜さん(東海大学)が、ベストディベーター賞を受賞した。

第1回全国大学生日本語ディベート大会の DVDについて

全国大学生日本語ディベート大会の様子を編集したDVDを作成しました。昨年12月に行われた南部および北部予選と、今年3月に行われた本選の試合の様子を収録しており、日本語センター閲覧室で視聴できます。また、貸し出しもしておりますので、試合をご覧になれなかった方、ディベートの授業などに役立てたい方、どうぞご利用ください。

ディベート関連情報については、当協会ホームページを参照。

第2回全国大学生日本語ディベート大会 「論題」公募

「第1回全国大学生日本語ディベート大会」に引き続き、来年度も第2回が行われます。次回の論題に関して、推薦論題を募集し、複数の論題候補について主催者を中心とした話し合いで検討し、決定致します。

論題の選考にあたっては、「政策論題であること(思想、宗教等個人の価値観に著しく左右され得る論題は採用しない)」「台湾社会の現状に関連性があること(大会開催日までに法制化等が行われる可能性がないもの)」「複数のメリット・デメリットが見込めること」「論拠となりうる日本語の資料が豊富にあると考えられること」等が考慮されます。

論題の応募は、①論題、②論題の背景(論題に関する現状分析)、③推薦理由(妥当性、証拠資料の有無等)、④氏名及び連絡先を明記の上、Eメールでご送付ください。

E-mail : nihongo@mail. japan-taipei. org. tw

公立高中第二外国語（日語）連合成果発表会



舞台上では日本語によるパフォーマンスが披露された

4月30日（土）に台北市立百齡高級中学において、「第二外国語日語連合成果発表会」が開催された。今年度は「旅の祭」というテーマのもと、「日本の旅」（ポスター発表）、「青春物語」（舞台発表）、「神隠し楽園」（出店）と銘打った3つの分野に分かれて、各校の生徒たちが日頃の勉強の成果を発表した。

「日本の旅」では、生徒たちがインターネットなどを駆使して調べた日本各地の名所・名物をポスター形式で紹介した。

「青春物語」では、日本語の歌や演劇が披露され、観客を楽しませた。「神隠し楽園」の会場となった中庭では、軽食やゲームなどを通して日本の生活文化が紹介された。このほか、台北市士林社区大学による展示や茶会、廈門大学教授による日本文化講座などもあり、バラエティに富んだ内容となった。天候にも恵まれ、多くの来訪者でにぎわった。

東呉大学 2005 年日語教学国際会議

4月30日（土）に、東呉大学にて「日語教学国際会議」が開催された。冒頭の蔡茂豊氏（東呉大学客員教授）による基調講演「台湾日本語教育の教授法」の後、3会場に分かれ、水谷信子氏（明海大学教授）、長友和彦氏（宮崎大学教授）、李漢燮氏（韓国高麗大学教授）による講演、および文学・日本語教育・日本語学の各分野にわたる33本の論文が発表された。論文発表の後には、田中章夫氏（東呉大学客員教授）による「ことばのユレ」、湯廷池氏（東呉大学客員教授）による「言語分析と言語教育」と題した特別講演が行われた。国際会議の名にふさわしく、日本・韓国など海外からも日本語教育関係者が多数参加し、各会場の質疑応答では活発な意見交換が行われ、各分野の研究発展のために諸外国との連携を図る上でも大変貴重な機会となった。

静宜大学 2005 年中部地区日本研究学術討論会

5月21日（土）に、静宜大学にて「2005年中部地区日本研究学術討論会」が開催された。前半には、日本文学から社会科学の分野にまでおよぶ幅広い研究発表が行われた。後半には、中部地区の日本語学科を持つ大学8校の日本語学科主任等による総合座談会が行われ、各学校の現状とこれからの展望について報告があった。学校の特色を出すため、各学校とも教員の増員、日本の学校との交流促進、卒業後の進路を見据えた企業との連携強化などさまざまな方策をとり、学生の学習面におけるニーズを的確に把握し、カリキュラムで応える努力をおこなっているという状況が具体的に披露された。そのなかで、中部地区には地区全体をカバーするような教師会や勉強会が少なく、日本語教育関係者や学校同士の交流も一部で行われているに過ぎないという指摘があり、今後中部地区の大学同士の連携を強化していくことが提案された。

全国応用日語教学研討会

6月4日（土）、高雄餐旅学院国際会議場において、全国応用日語教学研討会が行われた。劉育俊氏（屏東商業技術学院主任）による「応用日語の実践」、黄招憲氏（高雄餐旅学院教務長）による「餐旅類における日本語教育」と題する講演の後、午後からは「餐旅教育」「法・商学及び社会科学」「語言文化学・文学」に分かれての「分組座談」が行われた。

その後の総合座談会には、台湾南部を中心に日文学系、応用日語系の主任等7名が参加し、各教育現場の現況及び将来に関する意見交換が行われた。また、第4回役員大会が行われ、黄招憲新理事長をはじめ、新たな役員が選出された。新体制による第1回例会は10月に予定されており、台湾南部を基盤とする教員・研究者組織として今後の活動が期待される。

大葉大学 2005 年日本語学国際学術検討会

6月4日（土）に、大葉大学において「2005年日本語学国際学術検討会」が開催された。午前中は宮島達夫氏（京都橘大学客員教授）による「外来語と「外行語」」、鈴木泰氏（東京大学教授）による「現代日本語の時間表現について」という二つの講演があり、午後には田中章夫氏（東呉大学客座教授）による「近代のコトバ論議」、蔡茂豊氏（東呉大学客座教授）による「JFLにおける自然習得の応用—台湾の場合」という二つの講演が行われた。その後、「今後の日本語の展望」と題した討論会が行われ、活発な議論が交わされた。

第27回中等教育機関日本語教師研修会



黄繼仁氏

3月19日(土)に、日本語センターにおいて、「第27回中等教育機関日本語教師研修会」が開催された。黄繼仁氏(嘉義大学師資培育中心助理教授兼課程組組長)を講師に迎え、「日本語クラスの運営方法」と題して講演とワークショップを行った。

日本語教育に特化したこれまでの研修会とは異なり、今回は教育学の視点からクラス運営における問題点を挙げた。学習者の心理や教室での教師の態度など、学習者との関わり方についての考察がなされ、日頃の授業を異なった視点から振り返り、改善点などを考えるよい機会となった。後半のワークショップでは、前半の講義で取り上げられた問題点の解決方法を考えるグループセッションが行われた。

また、講師と受講者が中国語によってコミュニケーションをとることができたため、これまでにない活発な質疑応答や意見交換が交わされた。

のアイデアが数多く発表され、教材作成や教室活動に関して、受講者同士で意見を交換する場となった。

また、発表後に、ワークショップで作成したWebQuest形式の教材をグループ毎に教室に貼り出し、ポスターのギャラリーウォークを行った。その際、受講者一人ひとりが、それぞれの発表に評価とコメントを付していく形をとったため、ポスターセッションの後、すぐフィードバックが得られ、好評だった。



ワークショップの様子

第5回日本語教育実践講座(高雄) / 第28回中等教育機関日本語教師研修会(台北)



長坂水晶氏

4月16日(土)に高雄の文藻外語学院において「第5回日本語教育実践講座」が、17日(日)に当協会台北事務所の日本語センターにおいて「第28回中等教育機関日本語教師研修会」が開催された。両講演とも長坂水晶氏(国際交流基金日本語国際センター専任講師)を迎えて、「インターネットを活用した日本語教育」というテーマの

もと、講義とワークショップが行われた。インターネットを活用した教材作成に関する研修会は、これまでも様々な講師を迎えて行ってきたが、今回は「WebQuest」に焦点をあてた内容であった。「WebQuest」という言葉になじみのない受講者もいたが、実際に講義を進めると、インターネットを学習のツールとして、ネット上を探検しながらタスクを達成するという活動形式は非常にわかりやすく、反響の高い研修会となった。ワークショップでは、台湾ならではのWebQuest

2005年度第1回特別講演会

5月29日(日)日本語センターにて、「2005年度第1回特別講演会」が行われた。町博光氏(広島大学教育学研究科教授)を講師に迎え、「日本語教育と日本語の方言」をテーマに講演会が行われた。「方言」というと、「中央」に対する「地方」という連想から「低いもの」というイメージが伴うことが多く、日本語教育においても「日本語教師は標準語を教えるのであって、方言に染まっちゃいけない」と考える教師、学習者が少なくない。今回の講演では方言を「地域で生活する人にとって、標準語に代えることのできない生活のための言語」である「生活語」として捉え、地域(文化)理解を意識した日本語教育の必要性について話され、与那国、広島などの方言を視聴し、方言のもつ感情融和的な役割について考えた。また、方言の持つ役割を意識して編纂された教材例(『もみじひろしまで学ぶ日本語』(財)ひろしま国際センター編)や、各地域における方言の教材化への取り組み、地域語教材のシラバス化についても紹介された。講演の最後には、日本に暮らす日本語学習者の方言受容の意識に関する調査結果や、若者が話す言葉の中に見られる方言・位相差などにも触れ、方言の様々な側面について考えるよい機会となった。

第29回中等教育機関日本語教師研修会

日時：6月25日（土）10:30～17:00
 会場：（財）交流協会台北事務所3F 日本語センター
 テーマ：「日語創新教学設計」
 講師：甄曉蘭（国立台湾師範大学教育学系教授）
 張麗珍（台北市立士林高級商業職業学校講師）
 申し込み締切り：6月22日（水）

2005年度日本語教育夏期研修会

テーマ：「教室内での教師のこぼれ：理論と実践」
 講師：横溝紳一郎（広島大学大学院教育学研究科助教授）
 柳瀬陽介（広島大学大学院教育学研究科助教授）
 申し込み締切り：8月18日（木）
 〈台北会場〉
 日時：8月28日（日）・29日（月）9:00～
 会場：（財）交流協会台北事務所3F 日本語センター
 〈台中会場〉
 日時：8月31日（水）9:00～
 会場：東海大学（台中市中港三段181号）
 〈高雄会場〉
 日時：9月2日（金）・3日（土）9:00～
 会場：文藻外語学院（高雄市三民区民族一路900号）

今回の研修では、教室内での「ティーチャートーク」と「媒介語使用」について、実際の授業の映像を見ながら分析し、理論的に説明します。また、その成果をどのように研究に結びつけるかについても解説されます。

東海大学日文系
2005年国際シンポジウム

日時：7月2日（土）9:30～・3日（日）8:20～
 会場：東海大学人文大樓茂榜庁
 テーマ：「台湾・韓国・沖縄で『日本語』は何をしたのか？」
 問合わせ：東海大学日文系（04-2359-0121 内線3171）

東呉大学主催
第7回全国高校生日本語スピーチコンテスト

予選申し込み締切り：9月10日（土）
 予選結果発表：9月23日（金）
 決戦：10月29日（土）
 問合わせ：東呉大学日文系（02-2881-9471 内線6524）

日本語関連行事予定**6月の予定**

25日（土）第29回中等教育機関日本語教師研修会
 会場：交流協会日本語センター

7月の予定

2日（土）・3日（日）
 東海大学日文系2005年国際シンポジウム
 会場：東海大学人文大樓茂榜庁
 16日（土）日本語学会例会
 会場：台湾YMCA城中会所2F

8月の予定

20日（土）日本語学会例会
 会場：台湾YMCA城中会所2F
 28日（日）・29日（月）
 日本語教育夏期研修会（台北会場）
 会場：交流協会台北事務所3F
 31日（水）日本語教育夏期研修会（台中会場）
 会場：東海大学

9月の予定

2日（金）・3日（土）
 日本語教育夏期研修会（高雄会場）
 会場：文藻外語学院
 17日（土）日本語学会例会

『いろは』6月20日号 目次

- 1～3 台湾日本語教育情報源
 - 4 日本語・日本語教育のキーワード
 - 5～6 日本語教育ニュース
 - 7 日本語センターの活動報告
 - 8 日本語センターからのお知らせ
- 台湾日本語教育関連情報

情報をお寄せください

台湾の日本語教育に関する情報を募集しております。また、本誌に対するご意見やご要望もお待ちしております。詳細は日本語センターまでお問い合わせください。

TEL：02-2713-8000（代表）

FAX：02-2713-0705

E-mail：nihongo@mail.japan-taipei.org.tw